特別寄稿

里山看護学と禅と「やまと」文化と金子みすゞ

北山秋雄[1)]

[1)] 長野県看護大学

長野県看護大学紀要
第24巻別刷
2022年３月

Bull, Nagano Coll Nurs. 長野県看護大学紀要
24: 1-8,2022

特別寄稿

里山看護学と禅と「やまと」文化と金子みすゞ

北山秋雄

【はじめに】

私の研究活動は主として，1982年4月千葉県衛生研究所疫学調査研究室に入職してからの「マイクロELISA法による抗ウィルス抗体測定法」に関する研究と1989年4月厚生労働省国立公衆衛生院（現国立保健医療科学院）に異動してからの「子どもの虐待（特に性的虐待）」に関する研究，および1996年4月長野県看護大学に着任して以降の「里山看護学」と「遠隔看護学（Salusシステムの開発と普及）」に関する研究に大別することが出来る．

本稿では紙面の都合上，退任以降も研究を継続する予定の「里山看護学」を中心に述べる．また，本稿のタイトルが「里山看護学と禅と「やまと」文化と金子みすゞ」と散文的であり，内容も平易・広範な半面，やや学術性に欠けることを予めお断りしておきたい．

【里山看護学】

2006年4月 長野県看護大学大学院博士前期課程に「健康資源開発看護学領域里山看護学分野」が創設された（長野県看護大学学報，2008）．もとより里山看護学（Satoyama Nursing）を標榜する分野を持った大学は，現在まで国内外で長野県看護大学のみである．「里山看護学」創設の詳細な経緯については長野県看護大学学報（長野県看護大学学報，2008）に譲るが，長野県知事が吉村午良氏（1980年-2000年）から田中康夫氏（2001年-2006年）に替わったあと，「県立看護師等学校養成所あり方検討会（座長 黒岩卓夫氏）」が発足し（2003.9），「長野県看護大学のパーパス（存在意義）は何か？地域貢献を明確にした大学像（カリキュラムと組織の改革）を示す」ことが喫緊に求められた，21世紀に入ると，西欧を中心に自分たちの暮らす地域を自らの手で再生･活性化していくコミュニティ・ディベロップメント（地域社会開発）が注目され始め，田中県政でも地域の主体形成と公共政策の役割について思量する際，その考え方と手法が検討された（橋本理，2007）．そのような県の取り組みの一環として，県立大学である長野県看護大学もカリキュラムを中心とした教育変革が求められた．そこで小規模かつ比較的容易に取り組める大学院改革から着手することになり，地域医療・農村医学に造詣が深く，長年南相木村の診療所長であり佐久総合病院にも所属していた色平哲郎氏を非常勤講師に迎えて，2003年度大学院の共通科目として「コミュニティ・ディベロップメント」を開講した．この講義の中で宇沢弘文（2010）の「社会的共通資本（Social Common Capital)」や「コモンズ（Commons)」，佐久病院の「地域医療」等をしばしば取り上げた．

私は本学に着任（1996年）する以前は厚生労働省国立公衆衛生院（現国立保健医療科学院）で保健師，医師，獣医師等公衆衛生に携わる技術者の養成･訓練と調査研究を行っていたので，しばしば「合同臨地実習」で研修生を引率して当時地域医療に先駆的な信州の佐久病院（院長:若月俊一，現佐久総合病院）やゆきぐに大和病院（院長:黒岩卓夫）を見学していた．私も出身地が石川県奥能登地方であったことから，信州の佐久地方や新潟県の南魚沼地方ののどかな棚田の風景（ふるさとの原風景）と二人の院長の地域医療に対する熱い想いが琴線に響いた．その頃から，わたしの脳裏に地域≒農村≒里山のイメージが醸成されてきたものと思われる．

「里山」の名称に関する史料的研究の詳細は他に譲る

として（丸山，2022），ここでは特に「自然と人間」の視点から考察したい．近年，特に里山が注目されるようになったのは，1960年代後半に森林生態学者四手井綱英（1975，2006）が里山を「人里近くにあって人々の生活と結びついた山，森林」と措定したこと，高度経済成長期以降のリゾート乱開発等自然の破壊を通して，里山の保全と生物多様性の維持が相互に深く関係していることが明らかになってきたことによる．Rachel L. Carsonの著書（1962，1965）『沈黙の春』（Silent Spring）や『センス・オブ・ワンダー』（The Sense of Wonder）は当時の生態系破壊の危険性を取り上げた好著である．2010年生物多様性条約第10回締約国会議でも同様のコンテクストで，里山を「生物多様性を維持しながら，人間の福利に必要な物品･サービスを継続的に供給するための人間と自然の相互作用によって時間の経過とともに形成されてきた生息･生育と土地利用の動的モザイク」と定義している（環境省，2010）．我々（深山，那須，多賀谷，野坂）は里山を「人間社会とその生活環境としての自然が持続的に共存関係を維持している中山間地域」あるいは「原生的な自然と都市との中間に位置し，地域住民の生活と密接に結びついた森林や農地などに係る様々な活動を通じ，自然と人間の持続可能な相互依存関係および経済的な営みがみられる限定された地域」と定義している（吉村ら, 2013）．さしずめ里山（へき地，島嶼等）とは「人々が自然と共存するために創出した二次的自然空間」と言えよう．また宇沢弘文（2010）が述べているように，里山は西欧でコモンズ（入会地）と呼ばれる社会的共通資本のひとつであり，「ある特定の集団やコミュニティにとって生活上・生存上重要な役割を果たす希少資源またはそうした資源を生み出す特定の場所について，特定の利用ルールを定めて管理運営する制度または場所のこと」である．伝統的にこの里山の暮らしを通して，人々は自然と向き合い，原初以来，生き方や価値観，文化や宗教を醸成し脈々と伝承してきた．元来，私たち日本人にとって自然は畏怖畏敬の対象であり，必ずしも対峙したり克服したりすべき対象ではない．自然は時に過酷であり残酷であるが，多くの場合豊穣と安息（やすらぎ）をもたらすと認識されてきた．その意味で里山は人々の「日々の暮らしそのもの」が凝集された場所と言えよう．なお2010年生物多様性条約第10回締約国会議では「里山」を「Satoyama」と英語表記するとともに，「socio-ecological production landscapes」と定義している（環境省，2010）．

里山看護学は人々が自然と向き合い寄り添いながら，「人間と自然が持続可能な共存関係にある地域（農山村，離島等）づくり･健康づくりのためになされる生活環境資源を発見し開発し活用する看護実践」のことである．また里山の自然や生活環境は地域ごとに固有の風土や文化に根差していることから，必ずしも一律に規定できるのもではないのと同様に，今日人々の価値観は複雑化･多様化し健康課題も広域化･多問題化して，普遍的単一的看護アプローチでは解決が困難な事例が山積しており，里山看護学も地域ごとに固有の健康課題に焦点化した学際的な看護実践が求められている．すなわち里山看護学は「学際的なアプローチを通して，里山で育まれた固有の（食）文化や伝統・慣習（冠婚葬祭），共同意識（Community Identity）や共感などを健康資源として再構築再定義する看護の学問領域」である．最近，日本学術会議（2020）は，全国一律一様な「地方創生」施策では地方の個別多様な健康課題の解決が困難であることから，多職種多領域と協働する看護学の新たな学術分野として「地元創成看護学（Town Community Nursing)」の必要性を提言し始めたのも同様の発想に基づくものと思われる．

加えて，里山との関連で注目されているのが「ソーシャル･キャピタル（社会関係資本：以下SC)」である（山根，1995；農村におけるソーシャル・キャピタル研究会，2007；藤澤ら，2007）．また，近年看護分野でもSCの研究が進んでいる（大森，2004；今村ら，2011；吉村ら，2016；吉村ら，2018）．先述の通り，里山看護学は里山で育まれた固有の（食）文化や伝統・慣習（冠婚葬祭），共同意識（Community Identity）や共感などを健康資源として再構築再定義する看護の新たな学問領域である．一方，SCは人々の協調行動が活発化することによって社会の効率性を高めることが出来るとの考え方のもとで，社会の信頼関係，規範，ネットワークのような社会組織の重要

性を説く概念である．この概念は1916年に米国の教育学者Hanifanが提唱したと言われている（内閣府国民生活局，2003；稲葉，2011）．その後フランスの社会学者Bourdieu(1986)，米国の社会学者Coleman（1990）が社会や他者との関わり（ある意味「投資」である）を通して生じる目に見えない「力」に着目するようになった．そして，このSCの研究を世界的に広める契機となったのは，Putnam(1993）が「Making Democracy Work」を著し，その中でSCを「協調行動の促進によって社会の効率性を高める社会制度」であり，その要素を信頼，互酬性の規範およびネットワークとみなしたことによる．BourdieuやColemanと異なるのは，Putnamは SCを個人のものとせず社会のものと考えて地域性や社会的結束による「力」をより重視した点にある．加えて，彼はSCが健康に与える影響についても言及した点にある．その後のSCは様々な分野の研究者によって定義づけや測定法の開発等が試みられてきた（Kawachi，2008；山内，2010）．わが国においては，1995年の阪神淡路大震災で「住民の助け合い」がSCの好例として世界に紹介された．また，「地域保健対策の推進に関する基本的な指針」（平成24年7月改正）でもソーシャルキャピタルを活用した自助及び共助の支援の推進や「地域における保健師の保健活動に関する指針」（平成25年4月改正）でも保健師の地区活動や健康なまちづくりにSCの醸成の有効性・必要性が明記された（厚生労働統計協会，2021）．今やSCは社会と健康の関係性を探究する学問（公衆衛生学，公衆衛生看護学等）の発展に不可欠な概念となりつつある（要藤，2018）．

文字通りSCは「人と人の関係性」に依拠する「力（資本)」に着目している．一方，里山看護学は「人と人の関係性」に加えて「人と自然の関係性」にも着目している．吉村ら（2013）も指摘するように，「自然という要素がSCの要素としてとらえられている文献は皆無」に近い．SC論では自然環境は社会的共通資本の範疇で捉えられることが多いため，SCに直接的に関係するものとして殆ど論じられていない．しかし特に里山では人々はしばしば自然の恵み（いのち）をいただき，「山には山の神様，棚田には水の神様を祀って」ともに生きており，自然は個人および集落の人々の暮らしをより豊かにする「力（資本)」となっている．里山では自然は個人及び人々の日々の暮らしに根付いており，「お互い様」「持ちつ持たれつ」しながら自然と向き合い寄り添いながら暮らしている．こうした背景を考慮すると，自然をSCの範疇で論じるのではなく，「里山キャピタル（Satoyama Capital)」という新たな概念の創成が必要である．その場合，里山キャピタルの要素として，「いのちへのまなざし」「静安」「自然との共生」「集落同一性Community Identity」が挙げられよう．「いのちへの畏敬のまなざし」は人々が自然の恵み（いのち）をいただいて生きていることへの感謝の念，例えば，木地師の「私らは木を活かして木に生かされている，木の生命（いのち）をもらってそれで生かされている」やマタギの「自分の暮らしに必要な量のいのちしか獲らない」「ほこらを作って鎮魂や感謝の祈りをささげる」「仕留めた獲物はすべてが“恵み（いのち)”として何ひとつ捨てない」など．「静安」は「花に話しかければ，花も応えてくれる感覚」など，草花や森や川，大地からの静逸を通して里山の人々はこころの癒しを享受している．「自然との共生」として里山には，定期的な山の手入れや間伐材の利用，古木や巨木を地域の宝として保全する活動や季節の山菜を無駄なく食することなどである．「集落同一性Community Identity」は冠婚葬祭や集落の清掃などの地縁活動，食文化や言語，慣習などを通して，集落内の人々の社会･人生観や価値観のベクトルが強まることを意味する．

先述の通り，里山キャピタルの第1要素として「いのちへのまなざし」を掲げたが，同時に里山看護学にとって「いのち」への向き合い方が新たな学術的課題である．私はその新機軸を「里山倫理（Satoyama Ethics)」と命名している．

今年（令和4年）は長野県諏訪地方で，「数えで7年」に一度の御柱祭（正式には「式年造営御柱大祭」）が行われる．この御柱祭の歴史を紐解く中で，私は特に「いのちをいただく」神事に注目してきた．神に肉を供え，共に食す．こうした「動物供犠」は“人間は殺生によって生かされている”という自然の恵み（いのち）に対する感謝の意を表している．「里山倫理」と

は，里山に居住する人々が自然の恵み（いのち），村の伝統，共同体の富の分配関係，貧困の共有などを通して形成されてきた，集団の中で守られるべきルールや行動様式全般を指す．カエルを神前に供える元日の「蛙狩」，鹿肉を献じる4月の「御頭祭」，動物を狩るときに唱える「諏訪の勘文」，宮崎県椎葉村の「板起こし」の際に唱える「諏訪の祓い」，一定方角を禁猟にする「サカメグリ」，「鳥総立の神事」などがそれにあたる．諏訪地方の人々は古くから御柱祭を通して，里山看護学の中核概念である「いのちへのまなざし」，すなわち「自然」や「生き物」に対する畏怖畏敬の念，「自然との共生」「静安」，コミュニティの同一性（連帯，紐帯，信頼）の無尽の価値を暗黙裡に感得していると推認される．御柱祭は諏訪地方の人々のまさに健康資源そのものと言えるのではないか．

【禅と「やまと」文化】

ウィキペディア（2022）によれば，禅は仏教用語で「心が安静の状態」を意味する サンスクリット語「ध्यान(dhyāna，ディヤーナ)」の音写である禅那（ぜんな）（＝禅定）の略語である．禅学者鈴木大拙（1941）によれば，「禅とは，人間の心の底にある，無限の創造性に徹して，これに順応して動作することである．（中略）無限の創造性は無限の可能性と同義とみてよい．仏教では，これを空という」．また，禅とは「経験であり実験であり悟りである，経験なしに知識はなく悟りもない」とも述べている．興味深いことに，本学の教育理念は「学生個々人のもつ可能性が最大限に開花すること」をめざしており，人間の心の底にある，無限の創造性に徹する禅の哲学に通底している．この教育理念は，本学の初代学長見藤隆子が作文したとされている（長野県看護大学学報，2003；見藤，2004）．因みに2015年頃から文部科学省の中央教育審議会等で「個人の能力と可能性を開花させ」の文言が散見されている（文部科学省，2015）．見藤は看護教育学を専門分野としたが，来談者中心療法（クライエント中心療法）の創始者である米国の臨床心理学者Carl Rogers.の信奉者であることでも知られていた．Rogersはこの非指示的面接技法を開発した1940年代，中国や日本にも渡航しており，丁度その頃大拙が米国で英語による禅の普及活動を展開し，その後空前の「禅ブーム」が米国を席巻していた時期でもある．見藤は長野県看護大学の学長に着任した後も「日本文化に根差した」看護倫理を探究していたことから，言葉や文字を超越した感性や感覚の大切さを認識していたものと思われる．通常，「日本文化に根差した」看護の対極には西欧の看護を視座することになる．すなわち近代哲学の始祖ともいわれているRené Descartes（1596～1650）の「我思う，ゆえに我あり」に代表される主体的・合理的・論理的思考に基づく西欧の看護のことであり，近代看護の基礎を築いたFlorence Nightingaleの「看護」である．通常，「日本文化に根差した」とは禅の哲学のことであり，禅問答としてしばしば引用される「私は私でない，だから，私は私である」に代表される般若系思想である．禅宗では，「不立文字（ふりゅうもんじ）」と言われるように文字や言葉による伝達以上に，体験によって得られるものこそ事物の真髄本質であるとされている．文字や言葉，意識，観念概念は意味をなさず，「私は私でなく私である」「見ずに見る」「聞かずに聞く」の如く主体も客体もなく，意識することも感じることもない否定も肯定もない無我無心の境地になって初めて事物の真理本質（悟り）に至ると考えられている．大拙（2010）のいうところの「即非の論理」である．現に目に見えるもの，文字や言葉では何物も完全には把握出来ない．実際，面接のときなど，相手のことをよく理解しようと身構えているときには却って分からなくなり，そのことを意識しなくなると相手のことがよりよく理解できることがある．事物の本質を理解するには目に見えるもの，文字や言葉，意識，観念概念に囚われ過ぎないことが肝要である．Nightingaleも看護の基本は「フィーリング」（感情・感覚）と述べていることに通じる（見藤，2004；ICN（国際看護師協会）編著　南，2011）．大拙は，自然と世界の破壊をもたらす主体的・合理的・論理的思考に基づく西欧的な科学万能主義も日本的な精神万能主義にも与することなく，すなわち目に見えるもの（物質）と目に見えぬもの（精神）という二元論的な対立と矛盾ではなく，一元的（超越的）な融和と統合としての「霊性」という新たな理念を通して，有限な個の存在＜個己＞

の中に個己を超えた＜超個己＞を感得した．そのことを大拙は「即非」といい「直覚」と述べた（鈴木，2010）．

現在，人類は世界史の新たな一大転換点に立っている．18世紀から19世紀にかけてヨーロッパと米国で始まった第一次産業革命を皮切りに，今日第四次産業革命が進行している．こうした産業革命では新しい技術が登場・普及するだけでなく，産業構造や社会構造，人々の人生観価値観等に大きな変革・変化がもたらされてきた．特に，人々の精神や価値観のあり様は社会構造や産業構造の根底をなすものである．先述の通り，近代の産業はDescartesの「我思う，ゆえに我あり」に代表される主体的・合理的・論理的思考に基づいて発展してきた．一方で，古来東洋人特に日本人の心性に通底している思考は「我は我ならず，ゆえに我なり」という，意識，理屈や分別，論理以前（超越した）の無意識，未分別，直理直観をして真理本質に至る物の見方である．大拙（1945）によれば，このような思考の代表例のひとつが金剛経第十三節の「仏説般若波羅蜜，即非般若波羅蜜，是名般若波羅蜜」であり，般若系思想の根幹をなす思考であり禅の思考である．言い換えれば，「AはAでない，ゆえにAはAである」．般若系思想，すなわち禅では，文字や言葉，意識，観念概念以前の境地･作法を通して初めて事物の真理本質（悟り）に至ると考えられている．すなわち，このことは人間の認識には限界があることを示唆している．

日本古来の「やまと」文化は「おかげさま」の言葉に代表される文化であり，今でも私たち日本人はしばしば「おかげさまで，元気に暮らしています」などとあいさつを交わす．この「おかげさま」は「人間は何かに支えられて暮らしており，決して自分だけの力で生きているのではない」ことを示唆している．同様の言葉に「自ず（おのず）から」がある．「自ずから」は「みずから」とも読む．「お茶が入りました」「ご飯の用意が出来ました」「子どもが授かりました」のように，あたかもひとりでにお茶が入ったりご飯の用意が出来たり子どもが授かったような物言いをする．こうした「おのずから」「何か」の働きを本居宣長は「神々の働き」と形容した．私たちの日常の出来事は主体的判断による行動で解決できるものと自分ではどうにもならない「自然の働き」「何か」によって成り立っていると深層理解･共感することが，自らを戒め，自然を畏敬し，足るを知ること，すなわち人間の限界を知り欲望を制御すること（謙虚であること）に役立つものと思う．

【金子みすゞ】

こうした「神々の働き」「自然の働き」「何か」を感知感得し見事に詠んだ詩人が金子みすゞである（金子，2004）．みすゞは山口県仙崎出身で，26歳の若さで自裁した早逝の詩人である．仙崎は浄土真宗（西本願寺派）の教えが根付くとてもご法儀の篤い地域である．みすゞは，篤信な浄土真宗の家に育ち，特に祖母とともに二十年間は朝晩欠かさずお仏壇にお参りしていたという（松本，2022）．私の出身地は石川県奥能登地方の片田舎で，私の実家も代々浄土真宗（東本願寺派･大谷派）の正光寺門徒である．私も幼い頃，祖母によく正光寺の報恩講に連れて行ってもらった．私が初めて金子みすゞのことを知ったのは，朝日新聞の解説「閑話休題」で「金子みすゞのこと」を紹介した記事である（河谷，1996）．その後，法名が釈妙春信尼であることから浄土真宗門徒であったことが一目でわかったことや浄土真宗の法話集や報恩講などで金子みすゞの詩が耳目に触れるようになった．何だかとても懐かしい親近感を抱いたことを覚えている．

こうした「神々の働き」「自然の働き」「何か」を浄土真宗では「他力」ともいう．この他力を端的に読んだ詩が「蓮と鶏」である．

蓮と鶏

泥のなかから
蓮が咲く。

それをするのは
蓮じゃない。

卵のなかから
鶏（とり）が出る。

それをするのは
鶏じゃない。

それに私は
気がついた。

それも私の
せいじゃない。

「泥のなかから蓮が咲く」ことは蓮の意思でも力でもなく，「卵の中から鶏（とり）が出る」ことも鶏（とり）の意思でも力でもない，そのことに気付いたことさえ私のせいではないと全否定して，何物か他力によって「気づかされた」と展開している．人間の主体的・合理的・論理的なコンテクストとは異質の，いわば宇宙の摂理（悟り）を金子みすゞは感知感得し見事に詠み上げている．

【結び】

このように里山看護学と禅と「やまと」文化と金子みすゞの詩に通底する思想は，いのち（宇宙なるもの）に対するまなざしと・畏怖畏敬の念である．看護職者には看護の知識や技術だけでなく，いのちに対するより根源的な哲学としての「叡智」の大切さを感知感得してほしい．

結びに，見えないものへの研ぎ澄まされた感性と思い遣りに溢れた金子みすゞの詩を紹介して擱筆する．

星とたんぽぽ

青いお空の底ふかく、
海の小石のそのように、
夜がくるまで沈んでる、
昼のお星は眼にみえぬ。
　　見えぬけれどもあるんだよ、
　　見えぬものでもあるんだよ。

散ってすがれたたんぽぽの、
瓦のすきに，だァまって、
春のくるまでかくれてる、
つよいその根は眼にみえぬ。
　　見えぬけれどもあるんだよ、
　　見えぬものでもあるんだよ。

文　献

Bourdieu P. (1986). The forms of capital. In：Richardson J, ed. Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education. New York : Greenwood, 241-258.

Coleman J. (1990). Foundations of social Theory. Cambridge : Harvard University Press.

藤澤由和, 濱野強, 小薮明生 (2007)：地区単位 のソーシャル・キャピタルが主観的健康感に及ぼす影響. 厚生の指標, 54(2), 18-23.

橋本理 (2007). 地域の主体形成と公共政策の役割－長野県の事例を中心に, サステイナブル社会と公共政策, 189-222.

ICN (国際看護師協会) 編著　南裕子監修 (2011). 現代に読み解く ナイチンゲール・看護覚え書きNotes on Nursing: A Guide for Today's Caregivers ――すべてのケア提供者のために, 日本看護協会出版会, 東京.

稲葉陽二 (2011). ソーシャル・キャピタル入門. 中央公論新社, 東京.

今村晴彦, 印南一路 (2011). 地区組織活動についての全国調査から―ソーシャル・キャピタルを醸成する保健師活動のヒント―. 保健師ジャーナル, 67(2)；119-126.

金子みすゞ (2004). 金子みすゞ童謡集④ 空のかあさま　上, 58-59. JULA出版局, 東京.

金子みすゞ (2004). 金子みすゞ童謡集④ 空のかあさま　下, 164-165. JULA出版局, 東京.

環境省 (2010). 生物多様性条約 (CBD) 第10回締約国会議 (COP10)(2010.10.18～10.29). https://www.env.go.jp/nature/satoyama/syuhourei/practices_en.html (2022.1.17).

Kawachi I, Subramanian SV, Kim D (2008). ソーシャル・キャピタルと健康―これまでの10年間と今後の方向性―. Kawachi I, Kim D eds, 藤澤由和,

高尾総司, 濱野強　監訳, ソーシャル・キャピタルと健康. 1版6刷, 日本評論社, 東京.

河谷史夫 (1996). 朝日新聞 閑話休題, 12.15.

長野県看護大学学報 (2008). 北山秋雄教授インタビュー「里山看護学を語る」, 25, 1-5.

厚生労働統計協会 (2021). 図説 国民衛生の動向2020/2021, 東京.

丸山徳次 (2022). 問題共同体としての里山学：龍谷大学〈里山学研究センター〉の16年, http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/81012038.pdf (2022.2.21).

松本郁子 (2022). NHK100分de名著 金子みすゞ詩集, 東京.

長野県看護大学学報 (2003). 見藤隆子学長インタビュー「学問としての看護：大学で看護を研究する意味とは」, 15, 1-3.

見藤隆子 (2004). 学長最終講義, 本学の理念をめぐって, 大講義室, 2004.1.28, 駒ケ根.

文部科学省 (2015). 中央教育審議会諮問「個人の能力と可能性を開花させ, 全員参加による課題解決社会を実現するための教育の多様化と質保証の在り方について」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gaiyou/010201.htm (2022.1.24).

内閣府国民生活局 (2003). ソーシャル・キャピタル―豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて. 国立印刷局, 東京.

日本学術会議 (2020). 提言「地元創成」の実現に向けた看護学と社会との協働の推進, https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t292-8.pdf (2022.2.21).

日本総合研究所編 (2008). 日本のソーシャル・キャピタルと政策―日本総研2007 年全国アンケート調査結果報告書―. 日本総合研究所.

農村におけるソーシャル・キャピタル研究会 (2007). 農村のソーシャル・キャピタル－豊かな人間関係の維持・再生に向けて. 農林水産省農村振興局, 東京.

大森純子 (2004). 高齢者にとっての健康―「誇りをもち続けられること」農村地域におけるエスノグラフィーから―. 日本看護科学会誌, 24(3)：12-20. 2004.

Putnam R. D. (2001). Making Democracy Work. Princeton University Press, 1993. 川田潤一訳, 哲学する民主主義. NTT出版, 東京.

Rachel L. Carson (1962). Silent Spring 青樹築一訳 (1974)『沈黙の春』,　新潮社, 東京.

Rachel L. Carson (1965). The Sense of Wonder 上遠恵子訳 (2021)『センス・オブ・ワンダー』, 新潮文庫, 東京.

四手井綱英 (1975). 山と森の人々. 中公新書, 東京.

四手井綱英 (2006). 森林はモリやハヤシではない―私の森林論. ナカニシヤ出版, 京都.

鈴木大拙 (1945). 般若経の哲学と宗教. 法蔵館, 京都.

鈴木大拙 (1941). 禅の諸問題. 大東出版社, 東京.

鈴木大拙 (2010). 日本的霊性 完全版 (角川ソフィア文庫), 東京.

宇沢弘文 (2010). 社会的共通資本としての医療を考える. 宇沢弘文, 鴨下重彦 編, 社会共通資本としての医療, 東京大学出版, 東京.

山根洋右 (1995). 農村におけるライフスタイルの分析とヘルスプロモーション技法の開発に関する研究. 日本農村医学会誌, 44(4)；625-634.

山内直人 (2010). コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルの役割. Environmental information science. 39(1)：10-15.

吉村隆, 北山秋雄 (2018)：中山間地域のソーシャル・キャピタルの検討. ―中山間地域 (岐阜県A市) と都市部 (愛知県C区) の量的調査から―. 日本農村医学会雑誌, 66(5)：548-561.

吉村隆, 北山秋雄 (2013)：中山間地域のソーシャル・キャピタルの特徴―里山に暮らす高齢者のインタビューを通して―. 日本ルーラルナーシング学会誌, 8：1-15.

吉村隆, 北山秋雄 (2016)：中山間地域におけるソーシャル・キャピタルの把握―量的調査方法の検討―.信州公衆衛生雑誌, 11(1)：13-23.

要藤正任 (2018). ソーシャル・キャピタルの経済分析―「つながり」は地域を再生させるか, 慶應義塾大学出版会, 東京.

ウィキペディア (2022). 禅,
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A6%85
(2022.2.25).

北山秋雄
〒399-4117
長野県駒ケ根市赤穂1694番地
長野県看護大学
Tel: 0265-81-5100　Fax: 0265-81-1256
E-mail:akitayama@nagano-nurs.ac.jp
Akio Kitayama
Nagano Prefecture
Nagano College of Nursing
1694 Akaho,Komagane,Nagano,399-4117 JAPAN
TEL: +81-265-81-5100 FAX: +81-265-81-1256
E-mail:akitayama@nagano-nurs.ac.jp